2026－11－1

66【街の散策からの気づき発見】

芭蕉庵史跡展望庭園と芭蕉稲荷神社散策

会員　K.T.

芭蕉記念館の見学を終え、庭の築山へ登る。外は隅田川の堤防だ。上流に新大橋が見える。下流は清洲橋だ。下流の堤防沿いの200m先に、芭蕉庵史跡展望庭園があるはずだ。裏木戸から堤防に出る。堤防の向こう側の下は隅田川テラス遊歩道が整備されている。清洲橋方向へ歩く、200mぐらい行くと、堤防道がとぎれていた。下って、区道を渡り、展望庭園の階段を登る。芭蕉像があった。庭園は12，3坪ぐらいの広さだ。思っていたより狭い感じがした。像の向こう側は、小名木川が隅田川に流れ込んでいる。小名木川は、旧中川と隅田川を結ぶ全長約5kmの運河だ。現江東区を横断するこの川は、江戸時代に行徳の塩を運ぶ為に開削されたのが始まりで、その後、塩以外の品物も運ぶようになり、寛永6年(1629)には江戸物流の重要河川となっていた。小名木川が隅田川に合流する萬年橋北側付近には、「川船番所」が置かれ、小名木川を航行する船荷を取り締まったという。「川船番所」は、その後、寛文元年（1661)に隅田川口から中川川口（現大島9丁目）に移転した。芭蕉が深川に転居した延宝八年(1680)の頃は、「川船番所」は既に移転していたので、静かであっただろう、と思う。芭蕉庵史跡展望庭園のあたりに深川芭蕉庵があった、という説もある。

記念館から隅田川上流

ビルの狭間の芭蕉稲荷神社

記念館から隅田川下流

芭蕉稲荷神社

展望庭園の芭蕉像

芭蕉庵碑

芭蕉稲荷神社へ向う。この場所から「蛙の像」が出てきたことから芭蕉庵があった、とされているところだ。住宅の一角にとり残されたような神社だ。「芭蕉庵跡」の碑と由来説明碑がある。**「俳聖芭蕉は杉山杉風に草庵の提供を受け、深川芭蕉庵と称して延宝八年(1680)から元禄七年(1694)大阪で病没するまでここを本拠とし、「古池や蛙飛びこむ水の音」等の名吟の数々を残し、またここより全国の旅に出て有名な「奥の細道」等の紀行文を著した。（中略）幕末、明治にかけて滅失してしまった。たまたま大正六年(1917)津波来襲のあと芭蕉が愛好したといわれる石造の蛙が発見され、故飯田源次郎氏等地元の人々の尽力によりここに芭蕉稲荷を祀り、同十年(1921)東京府は常盤一丁目を旧跡に指定した。（後略）」**、とある。門人の杉山杉風(1647～1732)は江戸幕府出入りの魚問屋の主人で豊かな経済力で芭蕉を支えた一人とされる。杉風は深川に魚の生簀がある番屋をもっていて、これを改装し、芭蕉に提供したという。これが第一次深川芭蕉庵、杉風から提供された草庵は火事で類焼。翌年、ほぼ同じ場所に第二次深川芭蕉庵が再建された。この庵は奥州の旅に出る前に人に譲った。芭蕉は、5ケ月の奥州の旅を終えた後、3年ほど近江や京に滞在している。この間に旅の記憶を整理し、「奥の細道」の推敲を進めた。元禄5年(1692)、江戸へ戻り、新築された第三次深川芭蕉庵に住んだ。この庵は12～13坪で、三部屋（三間）の茅屋、葭垣（よしがき）や枝折戸（しおりど）があり、南側に池を望む水楼のような作りだった、という。芭蕉庵の確かな場所は不明ながら萬年橋の北側にあったらしい。「展望庭園」か「芭蕉稲荷神社」のあたりであろう、といわれる。芭蕉の有名な「奥の細道」の作品は旅後、5年の歳月をかけ、なんども書き直され、元禄7年(1694) 初夏（旧暦4月頃）に完成、門人の能書家・柏木素龍に清書をたのんだ。同年5月に江戸を立ち、上方へ向かう。芭蕉は、この年10月に大阪で死去する。**「月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり」**、この有名な序章で始まる「奥の細道」の作品は、芭蕉没から8年後、元禄15年(1702)に門人の向井去来が所持していた清書本を元に京都の井筒屋で刊行され、世に出た。文字数12000～13000、現在の800字詰め原稿用紙換算で15枚ほどになる冊子は人気を博した、という。深川の街は芭蕉の遺産を大切に残している。